

胡適の結婚と母

羽 田 朝 子*

はじめに

胡適（1891～1962）は、アメリカ留学中の1917年1月に雑誌『新青年』に寄稿した「文学改良趣義」が文学革命の導火線となり、中国近代の新文化運動の中心人物となった。帰国後は26歳の若さで北京大学の教授に迎えられ、近代化を目指す青年達のスター的存在となった。この時期、胡適は文学革命とともに女性解放、自由恋愛についての言説を次々と『新青年』に発表している。1918年6月にイブセンの『人形の家』を翻訳し、女主人公ノラを、自立した人間として生きるため家を飛び出した勇気ある女性として紹介した。また1919年3月には創作劇『終身大事』を発表し、自由恋愛の成就のために、封建的迷信や風習にとらわれた封建的家を飛び出す自立した女性＝「中国のノラ」の形象を描き出してみせた¹。そして青年たちの間では『終身大事』に描かれたような家出や自由恋愛が封建社会への反抗として神聖化されるようになる²。

ところが胡適は新文化運動の最中の1917年12月に、母の命によって旧式結婚をしている。新婦の江冬秀は、読み書きのできない纏足をした女性であった。胡適は留学中にアメリカ女性と恋愛を経験し、また結婚後も知性ある女性との恋愛に揺れ動きながらも、一生この旧式結婚を破棄することはなかった。こうした胡適の言説と実生活との矛盾は、これまで多くの研究者の興味を引き、検討されてきた。その中でも、多くの先行研究が指摘するのは胡適の母親との葛藤である³。

胡適の母に関する代表的な資料としては、母が亡くなった1918年12月に胡適が執筆した「先母行述」、後年の著作である「我的母親的訂婚」（『新月』3巻1号、1931.3）、「九年的家郷教育」（『新月』3巻3号、1931.5）がある。後者の二編はのちに自伝『四十自述』（1933.9）にそれぞれ第一章、第二章として所収されている。『四十自述』自序で、胡適は「第一章（筆者注：「我的母親的訂婚」）は全く小説体を用いて一つの伝説をあとから書いた」と述べている。また「筆を自己の幼年の生活に進めたとき（筆者注：「九年的家郷教育」）には、いつの間にか小説の体裁を抛棄して、謹嚴な歴史叙述のなれた道に帰着していた」と言うものの⁴、第二章も幼年期の記憶をもとにしていることから、この二篇はかなり虚構性の高いものと考えねばならない。

これまでの先行研究では、胡適の母について検討する際にこの二篇を主な資料として用いており、そのほかの日記や書信といった資料に対しては深く触れられていない⁵。胡適は日記の中でたびたび母親について語っているし、また母との間でやり取りされた書信も数多く残っている。最も網羅的に輯められている『胡適遺稿及秘蔵書信』（黄山書社1994年）を見てみると、胡適から母への書信は112通、母から胡適への書信は92通にもものぼっている⁶。そこで本稿は書信、日記を中心に、胡適とその母との関係を掘り下げて具体的に検討したいと思う。

また婚姻をめぐる母との葛藤は、胡適に限らずこの時代の知識人にとって共通の苦悩であり、例えば魯迅、郭沫若といった知識人もこのために平素の主張を曲げ旧式結婚を受け入れている。このテーマを掘り下げるにより、中国の近代化を推し進めた知識人たちが、その過程でいかに封建勢力と衝突し、いかにそれに対応したかを窺うことができるだろう。

1. 胡適と母

胡適の母・馮順弟（1873～1918）は、安徽省績溪県中屯に生まれた。第一子として生まれたの

*比較文化学専攻

で、次に弟が生まれるよう「順弟」と名づけられた。馮家は代々農家で、生活は豊かではなく、順弟の父振爽（幼名・金灶）は他人の植え付けを手伝い、裁縫を請け負って過ごしていた。

1889年、順弟は16歳の時に32歳年長の胡伝（1841～95）に嫁いだ。胡伝は字を鉄花といい、胡家は代々茶を売買する商家であった。胡伝ははじめ科挙を目指すが太平天国の乱により挫折、上海の書院で学び、その後は地方高官の幕僚として活躍した。最初の妻馮氏は太平天国の乱で亡くなり、二度目の妻曹氏も病死しており、その後経済的な理由から長らく妻を持たなかった。ようやく生活が安定したので、故郷績溪に帰った時に媒酌人に縁談を依頼したのだった。馮家と役人である胡伝とは「門当戸対（家柄がつりあう）」とはいえず、順弟は妾として迎えられた。胡伝は馮家に相当の結納金を払い、家を改築したという。鉄花には曹氏が産んだ六人の子があり、他家へ養女に出された次女のほか、長女は順弟より七つ年上、長男は二つ年上、三女は二つ下、次男・三男（双子）は四つ下であった。順弟と胡伝の婚礼の三日後に、長男の婚礼が執り行われた。

結婚から三年後の1891年12月17日に、順弟は上海で初めての実子である胡適を出産した。胡適が生まれた二ヵ月後に鉄花が台湾へと転任したため、順弟は胡適をつれて台湾に移り住むが、まもなく1894年に日清戦争が始まり、また上海へ戻った。台東知州であった胡伝は台湾に残ったが脚氣にかかり、1895年6月に廈門で世を去る。この時、順弟22歳、胡適4歳であった。

胡伝亡き後の胡家の財政は厳しく、さらに長男はアヘンや賭博で散財し、悩みの種となっていた。家計は次男が漢口や上海で茶や酒を売買して工面するのに頼っており、財産権が次兄の手にあったため、順弟は支出を全て事細かに記帳し、豆腐一丁ですら次男に伺いを立てなくてはならなかった⁷。そうした中でも、順弟は胡伝の「胡適に学問をさせるように」との遺言を守るべく、胡適を4歳から家塾で学ばせ、13歳になると三兄が結核の治療に上海に行くのに同行させた。胡適は上海で新式の学校に通い、1910年に義和団事件の賠償金による国費留学生の試験に合格、アメリカ留学の機会を得て、1917年の帰国まで海外で過ごすことになる。1904年に家を出てから母が亡くなる1918年までの14年間、胡適は三度故郷に帰っただけで、母と過ごした時間は六ヶ月にも満たなかった。

頼るべき父を失い、肩身の狭い環境で育まれた母子の間の感情はとても深く、胡適は留学中の1914年6月8日、次のように日記に母について回顧している。

私の母は婦人の中の豪傑だ。22歳にして寡婦となり、継母となった。私の三人の兄は皆成人であり、私の母ひとりで困難に立ち向ったのであり、その苦しみは筆舌に尽くしがたい。しかし私の母はきちんと家を治め、内外から賢婦と称えられた。私の母は私を愛していたけれど、監督は極めて厳しく、誤りがあれば許さなかった。毎日夜明けになると、私の母は私を起こして座らせ、私に父の行いを語り、それに恥じないよう励まされた。私が幼い時いささか群を抜いていたのは、私の母のおかげにほかならない。（吾母爲婦人中之豪傑、二十二歲而寡、爲後母。吾三兄皆長矣、吾母以一人撐拒艱難、其困苦有非筆墨所能盡者。而吾母治家有法、内外交稱爲賢母。吾母雖愛余、而督責甚嚴、有過失未嘗寬假。每日黎明、吾母即令起坐、每爲余道吾父行實、勉以母忝所生。吾少時稍有所異於群兒、未嘗非吾母所賜也。⁸）

また、胡適は幼年時代母と過ごした時間を「母から極めて大きな、極めて深い、影響を受けた」⁹と言及している。「胡適がとても母親を敬愛して」いたことはよく知られており、故郷の績溪では語り草になるほどであった¹⁰。

2. アメリカ留学と恋愛

胡適の母は1904年、胡適が13歳になると胡適よりひとつ年上の江冬秀（1890～1975）との婚約を取り決めた。彼女は教育を受けたことが無く、纏足をした旧式の女性である。江家は績溪县から程近い旌徳県きっての富豪で、また母方の曾祖父は探花で及第、祖父は進士に及第したというほどの名家であった。胡伝亡き後、家が傾いた胡家とでは「門当戸対」とはいえないが、江冬秀の母は胡適が群を抜いて聡明だという噂を聞きつけ、是非にと望んだという。胡適は上海の新式の学校で新思想に触れ、すでに自らも女性教育の必要性を説き、旧式結婚に反対しており、当然この婚約には不満を感じていたはずである。胡適はアメリカ留学前に結婚をせかす母に対し、対面を保つだけの経済的余裕が無いことを理由に、先送りにするよう強く主張している。

2. 1 母と婚約者

胡適はアメリカ留学へ向った後、毎月母に手紙と写真を送るようにとの言いつけを守り、異国での自分の生活についてのほか、アメリカでの見聞、社会、時事について事細かに報告した。

胡適は胡家の四男ではあるが母にとってはたった一人の実子であり、実質上の長男として母を養わなくてはいけない、との気負いを感じていた。1909年に家が破産したため、胡適は上海で華童公学の教師をして母に仕送りをし、アメリカ留学中も奨学金や原稿料から幾許かのお金を送っていた。それでも母の生活は苦しく、方々から借金をして暮らしていたという。

しかし胡適の母は苦しい生活の中でも、胡適の勉学のためなら便宜をはかり、胡適の欲しがっていた図書を買ひ求め、アメリカまで送っている。このことは胡適の1914年3月12日の日記に述べられている。

家書を見るに、窮状を述べている。老母は首飾りを質入れして年を越したという。そればかりでなく、守煥兄の家に『図書集成』が一部あり、家が貧しいので値引きしてもらい八十元で買った。私の母は私がこの本を欲しがっているのを知り、金を借りて息子に買ったのだ。母はこのような窮状にあっても、なお息子をこれほどまでに思っているのだ。（得家書，敘貧狀，老母至以手飾抵借過年，不獨此也，守煥兄家有《圖書集成》一部，今以家貧，愿減價出售，至減至八十元；吾母知余欲得此書，遂借貸爲兒子購之。吾母遭此窘狀，猶處處爲兒子設想如此。¹⁾）

胡適はこうした母の愛に感謝しながらも、子として母に孝を尽くせないことに後ろめたさを感じており、三ヶ月後の6月9日の日記には次のように記している。

私は家を去って十年余り、丁未の年（1909年）に帰って、わずか三ヶ月滞在しただけだった。庚戌の年（1910年）に国を去るときも、母に別れを告げられず、心残りに感じながら今に至っている。…（中略）…しかも私の母が産んだのは私一人であるのだから、…（中略）…十年の間故郷への思いを絶つことはできない。私の母は安心して勉学し、家のことを心配しないように度々書信で言ってくるが、これは私の母の子を愛する心である。人の子として残酷にも道理を顧みず、長らく国外にとどまって、慈母を顧みないことができようか。（吾去家十年餘矣，丁未一歸，亦僅做三月之留，庚戌去國，亦未能歸別吾母，耿耿至今。（中略）且吾母所生僅余一人（中略），十年倚閭之懷，何忍忽然置之？吾母雖屢書囑安心向學，勿以家事分心，然此是吾母愛子之心，爲人子者何可遂忍心害理，久留國外，置慈母于不顧耶？²⁾）

こうした状況の中、婚約者である江冬秀は胡適にとって自分のかわりに母に付き添い、孝を尽く

してくれる存在であった。胡適がアメリカ留学へ向うとき、江家では冬秀を南京へ行かせ多少なりとも教育を受けさせようとしたが、胡適は自分が不在の間の母を心配し、江冬秀に南京へ行かず母に付き添うよう頼んだという¹³。妻に教育を望んだ胡適ではあったが、それより母への気持ちが勝ったのであろう。また、前述の『図書集成』を買うため胡適の母が金を工面している時も、江冬秀が自分の腕輪を質に入れて助けたという¹⁴。また江家は母に奴婢を贈っており、これを知った胡適は江家に深く感謝している¹⁵。だからこそ胡適は母の取り決めに反対することなく、江冬秀を婚約者として認めたのであろう。胡適はアメリカに渡ってまもなくの1911年4月22日、江冬秀にはじめての手紙を送っている。

はじめて貴姉にお手紙差し上げます。たびたび母から手紙を受け取り、貴姉が私の家にいらっしやって私の母のために家の事を手伝ってくださっていると書いていました。これを聞きまして、ご母堂と貴姉の厚情に深く感じ入っております。家を離れて他所にいても、内顧の憂いなく過ごせます。(此吾第一次寄姊書也、屢得吾母書、具言姊時來吾家、為吾母分擔家事、聞之深感令堂及姊之盛意、出門游子、可以無內顧之憂矣。¹⁶)

これ以後、胡適は江冬秀と手紙のやりとりを始める。胡適には手紙のやりとりを通じてなんとか江冬秀に読み書きを覚えさせ、自分の妻にふさわしい相手に仕立て上げたいという気持ちがあったのかもしれない。少なくとも江冬秀を婚約者と認め、精神の交流をはかろうと努力する姿を窺うことができる¹⁷。

2. 2 アメリカ女性との恋愛

アメリカのコネル大学に留学して四年近くが過ぎた1914年6月、胡適は女学生たちと交流を始める。その動機は、胡適は幼い時、母と祖母、叔母や姉といった女性の指導を受けただけで、アメリカ留学に来て中年の女性としか交際がなかったのも、男女共学の大学で学んでいる「この機会を利用して、教育ある女性と交際し、その薫陶を受けたい」¹⁸というものだった。

そのなかで、胡適は生涯の恋人となるイーディス・クリフォード・ウィリアムズに出会う。彼女はコネル大学の地質学教授H.S.ウィリアムズの次女で、ニューヨークで美術を学ぶ知的魅力に富んだ女性であった。胡適は彼女と新式の結婚式を見学し、イブセンについて語りあうなど交流を深め、またウィリアムズ邸をたびたび訪問している¹⁹。彼女に次第に魅かれていく自分の心に歯止めをかけるかのように、胡適は次のような手紙をイーディスに送っている。

家族関係の点では、私は東洋の考え方を採用します。これは主に、私にはとてもとても良い母親があり、彼女の私への深い恩に報いるすべがないからです。私は長い間彼女から離れて暮らし、すでに私は深く深く恥じ入っており、もう彼女に背くことができないのです。(在家庭關係上、我採取東方的看法。這主要是因為我有一個非常非常好的母親、她對我的深恩是無從報答的。我長時間離開她、已經使我深感愧疚、我再不能硬着心腸來違背她。²⁰)

また胡適はイーディスとの交際を母に隠すことなく、1915年2月18日の手紙でイーディスについて次のように紹介している。「女士は思慮深い人で、心根はやさしく、見識は高く、私も多くの教えを受けております。私が折りにふれ母上の人となりをお聞かせいたしたところ、女士はそのたびにたいそう感心いたしまして、母上によろしくと私に言付けておられます」²¹。その後も胡適は母にイーディスの家に故郷安徽の特産を送るよう頼んだりするなど、胡適と母との書信にはたびたびイーディスやその母ウィリアムズ夫人の名前が挙げられるようになる。また胡適の母は

イーディスに、江冬秀に刺繍をさせたハンカチを贈ったともいう²²。

胡適はイーディスとの交際を深め、感情が高まるにつれ、婚約者である冬秀への気持ちが薄れたのか、彼女への手紙が間遠になっていく。さらには母への手紙の中で冬秀への不満がぶつけられることもあった。それを母に嗜められ、胡適は次のように返信している。

私が第三号書信で言及した冬秀の教育についての各節は、私の一時の感情で発した言葉であり、決して冬秀を責める意味はありませんし、さらには母上のせいにするわけでもありません。私はこのことに対し怨みの心をもったことはありません。私は母上が私の結婚に関して、実に心を砕き、力を尽くして、私のために良き家庭をと図られたのだとよく知っています。私に少しでも怨みの心があるとしたら、時勢を知らず、人情に通じず、善し悪しをわきまえない妄人です。(兒於第三號書中所言冬秀之教育各節,乃兒一時感觸而發之言,並無責備冬秀之意,尤不敢歸咎吾母.兒對於此事從無一毫怨望之心.蓋兒深知吾母對於兒之婚事,實已盡心竭力,爲兒謀一美滿家庭.兒如有一毫怨望之心,則真成不明時勢,不通人情,不識好歹之妄人矣.²³)

また江家では胡適がアメリカ女性と結婚したとの噂も流れ始め、江冬秀の母は衝撃のあまり病気になってしまったという。胡適の母はこのことを手紙で胡適に問い質したため、胡適は次のように弁明している。江冬秀との婚約を破棄するつもりはないし、アメリカで「女性と交際するとき、中国人であれアメリカ人であれ、まず私が婚約者のいる男性であることを知らせて」ていること、また自分には「もう配偶者を選ぶという心はありませんし、人も私が非望を抱いているとは思いません」と述べている²⁴。

結局、胡適はイーディスとの恋愛を諦め、プラトニックな友情を育んでゆくことを決心する。1915年3月28日のイーディスへの手紙に、次のように心の決着をつけていることが窺える。

私はとつくに彼女(筆者注:江冬秀)が私の知識上の伴侶となることに諦めています。これは当然残念なことです。…(中略)…しかし私は樂觀主義者です。私の母は読むことも書くこともできませんが、彼女は私が知るなかで最も善良な女性なのですから。(我早已放棄她來做我知識上的伴侶了.這當然不是沒有遺憾的.(中略)然而,我是個樂觀主義者.我母親既不能讀又不能寫,可是她是我所知一個最善良的女子.²⁵)

胡適は、自分の結婚相手が自分の理想とする知性を備えた女性でなくても、少なくとも敬愛する母のようであれば、と自らを慰めたのであろうか。

2. 3 「良妻賢母」から「自由独立した女性」へ——女性観の転換

胡適は、イーディスとの恋愛を成就させることはできなかったが、彼女との交流を通して女性に対する見方が大きく変わった。

アメリカ留学前、胡適は上海で中国公学の同窓生たちによる革新的な雑誌『競業旬報』に参加し、女子教育の必要性を説いていた。しかし後の『新青年』時期の言説を比べてみると、それは保守的な観点を残していた。

当時、胡適は「我々中国女性は男性のおもちゃとなり、自分では少しも自立できていない「废物」だ」とし、「女子才無きが徳」の観念に反対している。しかし「敬告中国的女子」(3期～5期、1906.11.16～12.6)によれば女子教育を主張する主な理由は次のようなものだった。

外国の子女は学堂へ入る前、家で父母から教えるを受ける。これを「家庭教育」という。しかし父親というものはいつも家にいるとは限らないから、このことは母親の責任となる。我々

中国人は幼い時、母親の多くが子を教えることができない。いくらか子に教えることができるものはいるが、彼女らは勉学や学問をしたことがなく、おのずと見識がないのである。…

(中略) …だから女性も勉学をして正しい道理を学び、広く学問を理解し、道理や学問が分かってこそ、子女に教えることが出来るのだ。(外國的小兒、沒有進學堂的時候、在家都要受他們父母的教訓、這就叫做「家庭教育」。但是做父親的、總不時時在家、所以這事便是做娘的責任了。我們中國人小的時候、做娘的多不能教訓兒子、雖然也有些會教兒子的、但是他們沒有讀書學問、自然沒有見識……所以女子一定要讀書才能夠懂得些正大道理、曉得些普通學問、道理和學問都懂得了、自然能夠教出好兒女來。²⁶⁾

また「論家庭教育」(26期、1908.9.6)では次のように主張している。

この家庭教育で最も大切なのは母親である。…(中略) …女学堂はすなわち良い母親を製造する大製造工場である。みなさん、もしよい子供がほしいというなら、家庭教育を振興すべきであり、家庭教育を振興したいなら、女学堂を大いに建設すべきなのである。(這家庭教育、做重要的、便是母親。……這女學堂便是製造好母親的大製造廠。列位要想得好兒子、便要興家庭教育、要興家庭教育、便要大開女學堂。²⁷⁾

ここで胡適が主張する女子教育の意義とは、子に家庭教育を施せる「良い母親」を製造するために過ぎない。こうした考え方には、幼いころ亡き父に代わって自分に家庭教育を施し、また周囲から「賢婦」として称えられていた母の影響が少なからずあったものと思われる。

しかしアメリカ留学後、イーディスとの交際を通じ、胡適の女子教育の意義に対する考えに大きな転換が起こるのである。イーディスとの恋愛が終わり、コロンビア大学に移ったあとの1915年10月30日の日記には、次のように記されている

私は我が友ウィリアム女史と知り合ってから、女性に対する考え方が大きく変わり、男女交際の関係についてもまた大きく変わった。女子教育について、私はこれまでも堅く信じてきた。しかし昔、目を向けていたのは、国家のために良妻賢母を造りだし、家庭教育の準備とするためであった。今、女子教育の最上の目的は、自由で独立した女性を作り出すことであると初めて知った。国家に自由独立した女性があってこそ、その国民の道德、その人格を高尚なものにすることができるのだ。(吾自識吾友韋女士以來、生平對於女子之見解爲之大變、對於男女交際之關係亦爲之大變。女子教育、吾向所深信者也。惟昔所注意、乃在爲國人造良妻賢母以爲家庭教育之預備、今始知女子教育之最上目的乃在造成一種能自由能獨立之女子。國有能自由獨立女子、然後可以增進其國人之道德、高尚其人格。²⁸⁾

後に胡適は『新青年』(5巻3号、1918.9)に『アメリカの婦人』を発表し、アメリカ女性は「個人の才能を発揮し、他人に頼らず、自分で独立生活をし、社会のために自分のすべきことをする」「良妻賢母を超えた人生観」を持っていると紹介した。そしてそのような「自立」の精神を持つ女性の例としてイーディスの名前を挙げている。

胡適は母を「婦人の中の豪傑」、「賢婦」として絶対的な尊敬を寄せており、「良妻賢母」を理想の女性としていたが、イーディスとの恋愛によって彼女をモデルとした「自由独立した女性」観をもつに至ったのである。

3. 江冬秀との結婚

胡適は 1917 年末にアメリカ留学を終えて帰国した。そして新文化運動のリーダーとして自由恋愛、女性解放理論に関わる言論を次々と発表していく。上述の『アメリカの婦人』(5 巻 3 号、1917.9) もこの時期に発表したものである。

そして胡適が自立した女性を標榜し、自由恋愛を主張するのと同時に、胡適の旧式結婚も進んでいくことになる。胡適は帰国後も多忙を理由に結婚を延ばそうとするが、婚約からすでに十三年経ち、しかも江冬秀は 27 歳と当時の結婚適齢期を大きく上まっており、これ以上先延ばしにはできなかった。1917 年 12 月 30 日、故郷の績溪県で胡適は初対面の江冬秀と婚礼を挙げた。

胡適は本来、北京で完全な文明結婚の方法で式を挙げることを望んでいたが、母の反対に遭ったため妥協するしかなかった。それでも結婚式は旧式の礼を打ち破ったもので、結婚証書に新郎新婦と立会人の印を押し、指輪の交換をする簡単なものであった。そして天地への礼を省略し、祖先と夫婦同士の礼のみであり、しかも叩頭ではなくお辞儀だったという。このような婚礼は「当時の古い村では初めての新しい幕開けだった」²⁹という。

胡適は結婚前後あわせて五週間滞在したあと、北京大学から呼び戻される。彼は、病気がちだった母のため江冬秀を残し、単身で北京へ戻ることにするが、その後すぐに江冬秀を北京へ呼び寄せることにする。それについて胡適は 1918 年 4 月 13 日の母への書信で次のように述べている。

母上が冬秀を耘圃(筆者注:冬秀の次兄)と同行するのを承諾くださり、とても良かったです。私は母上が今病体でおられて冬秀を引き離すべきでない、もちろん分かっております。しかし私はここでとても寂しく、冬秀に来てもらいたいです。これは人情の常、母上におかれましては私が不孝だとお責めくださいますように。他人があればこれと批評するのには、私は構わないのです。(吾母肯令冬秀與耘圃同來,極好,我豈不知吾母此時病體不應令冬秀遠離?但我在此,亦很寂寞,極想冬秀能來,此亦人情之常,想吾母定不怪我不孝也。至於他人說長說短,我是不管的。³⁰)

表面上は新婚の愛情に満ちた内容に見えるが、実は胡適は江冬秀への不満を押し隠し、母の前では妻を慈しむ夫を演じていた。彼が江冬秀を呼び寄せたのは、彼女との手紙のやりとりのなかで、彼女のあまりの教育の低さを目の当たりにし、自分の側に置いて教育をする必要があると判断したためであった。この直後の 1918 年 5 月 2 日、胡適の族兄で友人でもある胡近仁への手紙には次のように本心を吐露している。

私のこのたびの結婚は、まったく私の母のためになすものであり、よって私は一度でもたてついたことはありません。(もしそうでなければ、私は決してこの結婚をすることはなかったでしょう。でもこれは貴兄にしか言えない事で、他人には絶対話せません。)今結婚したからには、私は努めてうまく折り合って、母の気持ちに沿うようしています。よって私が極力閨房の愛を表そうと努めているのも、また母を喜ばせようと思うからです。…(中略)…私が冬秀に早く来させるのも、その原因は家書にすでに詳しく述べてあり、すでに読まれたと思うが、これもまた救済の一つの方法なのです。そうでなければ私は十年あまりも一人住まいをしているというのに、この数ヶ月の寂しさに耐えられないことがありますか。これはもう過ぎたことです、貴下はこの書信を読まれた後、どうかこれを焼いて、他の人の口にのぼらないようにしてください。切にお願いいたします!(吾之就此婚事,全爲吾母起見,故從不曾挑剔爲難。(若不爲此,吾絕不就此婚。此意但可爲足下道,不足爲外人言也。))今既婚矣,吾力求遷

就,以博吾母歡心,吾之所以極力表示閨房之愛者,亦正欲令吾母歡喜耳,……吾之欲令冬秀早來,其原因已詳說於家書中,想已見之,此亦補救之一法,不然,吾十餘年獨居,豈不能耐此幾個月之岑寂耶?此事已成往跡,足下閱此書後,乞拉燒之,以望勿外人道,切盼!切盼!⁸¹⁾

自分の婚姻や妻への不満を押し隠し、ひたすら母に孝を尽くそうとする胡適ではあったが、従順に従っただけではなかった。例えば胡適は1918年8月24日に次のような書信を母に送っている。

家書に仙舫（筆者注：胡適の姉婿）に後妻を勧めるようにとの一節がありましたが、私はいたしません。彼自身が娶ろうとしないのは、必ず彼の道理があるのであり、どうして傍の者が彼に勧められましょうか。私は人に妻を娶るよう勧めるのが最も嫌いです。私は人に妻を娶るよう勧めもしませんし、娶らないよう勧めもしません。（家信中所說勸仙舫姊夫續娶一節, 我是不做的,他自己不肯再娶,想必有他的道理,何用旁人勸他?我最不愛勸人娶妻,我不但不勸人娶妻,還勸人不要娶妻。⁸²⁾

このように胡適は母の頼みをいつにない断固とした態度で拒んでいる。これには自分は旧式結婚を受け入れるしかなかったが、他人の旧式結婚に関わることを一切拒否しようとする強い意志が感じられるのである。

この時期、胡適が高らかと叫んでいた自由恋愛、女性解放の一連の言説の裏には、自らが旧式結婚に甘んじ、理想とはかけ離れた女性を妻としなければならなかったことへの憤懣、そしてそうした不幸な結婚が繰り返されてはならない、という強い思いがあったのではないだろうか。

3. 母の死

胡適の母は念願であった息子の結婚を見届け、江冬秀を北京に送り出すと、1918年11月23日に安心したかのように息を引き取った。原因は持病の喘息で、享年46歳であった。胡適は翌日に母が病死したとの電報を受けると、すぐさま故郷の績溪县に出発した。

胡適は故郷で喪に服している間に「先母行述」を創作し、主に次の点を挙げて母を賞賛している。若くして寡婦となり、年の変わらない先妻の子やその妻たちとの肩身の狭い生活のなか、よく忍んで家政をとりしきり、家門を支えたこと、私欲なく人に手厚く接したこと、父胡伝の「胡適に学問をさせるように」との遺言を堅く守り、我が身の心細さを顧みず、胡適を求学のために外地へ送り出したこと、である。そして次のように言う。

亡母が生んだのは、適一人であり、子を愛するがゆえに、幼くして遠方へ遊学させた。十五年の間、膝下に侍ったのはわずか四、五ヶ月に過ぎない。存命の間に彼女に孝養を尽くすことができず、病気でも付き添えず、生涯の間苦勞を少しも分担できず、永遠の別れに一目会う事もできなかった。一生涯の心痛のうちこれ以上のものがあるだろうか！伏して思うに亡母の一生の行いはささやかなもので家庭や郷里の範囲を出るものではないが、その卓絶した品性や真心は、永遠に留め不朽のものとすべきものがあり、ゆえに梗概を大まかに述べ、訃報とともに申し上げた。どうかお察しくくださいますように。（先母所生, 只適一人, 徒以愛子故, 幼歲即令遠出游學; 十五年中, 侍膝下僅四五月耳, 生未能養, 病未能侍, 畢世劬勞未能絲毫分任, 生死永訣乃亦未能一面, 平生慘痛, 何以加此! 伏念先母一生行實, 雖纖細瑣屑不出於家庭閭里之間, 而其至性至誠, 有宜永存而不朽者, 故粗敘梗概, 隨訃上聞, 伏乞矜鑑。⁸³⁾

胡適は女性観について劇的な変遷を経た後も、母に対して生涯変わらない深い愛情と敬愛の気持

ちを抱き続けたのである。

ところで、胡適は母の葬礼において、かねてから主張していた「旧礼に対する大々的な改革」を実行した。死亡通知や祭礼を簡略化し、和尚や道士を呼ばず、弔問客も最低限におさえた。また墓地も風水によらず、胡適が自分で選んで父の墓の近くに母を葬ったという。

こうした改革については母の死から一年後の 1919 年 11 月、『新青年』(6 巻 6 号)に「我對於葬礼的改革」という題で発表されることになる。胡適はこの意義について「私個人の生涯で最もつらい経験から得た見解や感想を著し、現在の葬礼の様々な改革すべきところや将来改革すべき大体の趨勢を指摘した」と述べている。

論文は明快な論理で展開し、楽観的な改革を提示しているが、しかし実際の葬礼ではそうはいかなかった。出棺の日に開かれた追悼会で、胡適は葬礼改革について演説を行ったが、悲しみのあまり声にならず、話の途中で途切れてしまった。話は再開されることなく、会はそのまま終わったのだという⁸⁴。

この姿には、胡適が改革を推し進めようとしながらも、肉親の情や孝の概念と衝突して押しつぶされる姿に重なり合ってみえるのである。

おわりにかえて

封建社会において、母は多くの犠牲を払いながら子に慈愛を注ぎ、それにより子は心に親への信頼・依存・親愛の情を形成し、それを土台に孝の精神を培っていく⁸⁵。旧い家に生まれ、母の苦しみを間近で見てきた胡適は、近代的な恋愛に憧れながらも、深い恩のある母に背いて旧式結婚を破棄することはできなかった。そして結婚後は、母のために妻と折り合う努力をする一方で、理想と大きくかけ離れた現実で憤懣を感じていた。こうした思いを胸に秘め、胡適は自由恋愛や女性解放といった家庭革命や、自己独立した「個人」となることを高らかに叫んだのだ。

結婚と母との葛藤は胡適に限らずこの時代の知識人にとって共通の苦悩であり、多くの人が旧式結婚を受け入れるしかなかった。封建制の縛りは肉親の情と一体になってその人に強く根ざしており、一人の人間としてそれを切り離すことは不可能であったのだ。本論を通して、新旧の時代が入れ替わる過渡期の中で、近代化を叫ぶ知識人が抱えた理想と現実の矛盾、そして彼らがいかに現実と折り合いをつけながら理想に近づこうと努力したかを窺うことができたであろう。

注

1. 胡適の新文化運動期に『新青年』に発表された女性解放や自由恋愛についての論文、および創作劇『終身大事』については、拙稿「胡適「終身大事」考」(奈良女子大学大学院『人間文化研究科年報』20 号、2004 年)で検討している。
2. 五四以後の青年たちの行動、恋愛神聖の思潮については、以下を参照。清水賢一郎「革命と恋愛のユートピア——胡適の<イブセン主義>と工読互助団」(『中国研究月報』中国研究所 573 1995 年 11 月)
3. 胡適の伝記では必ずと言ってよいほど婚姻について取り上げられているが、特に胡適の婚姻についての著作として、以下のものがある。郭宛『胡適——霊与肉之間』(四川文芸出版社 1995 年 3 月)、沈寂『時代隔鑑——胡適の白話文・政論・婚恋』(重慶出版社 1996 年 3 月)周海波『親情与愛情之間』(河南大学出版社 2003 年 6 月)など。しかし、胡適と母の関係に特に注目して掘り下げたものは管見の限りまだない。
4. 『四十自述』(姚鵬・范橋編『胡適散文』第四集 中国広播電視出版 1992 年 5 月)。『吉川幸次郎全集』16 巻(筑摩書房、昭和 45 年)に所収されている日本語訳を参考にした。

5. 白吉庵『胡適伝』（人民出版社 1993 年 2 月）では胡適と母の書信が資料として用いられている。
6. 胡適の書信のうち、妻の江冬秀への 124 通を除くと最も多い。同時代の知識人である魯迅が母へ寄せた手紙は 50 通であることから、その多さが伺えるだろう。
7. 胡適「先母行述」1918 年 12 月（耿雲志編『胡適伝記作品全編』第一卷（上）東方出版中心 1999 年）
8. 1914 年 6 月 8 日の日記。曹伯言整理『胡適日記全編』（安徽教育出版社 2001 年）
9. 胡適「九年的家郷教育」（「四十自述」『胡適散文』第四集、前掲書）
10. 程法徳「我所知道的胡適姻親」（沈寂編『胡適研究』第二輯、安徽教育出版社 1996 年）なお程法徳は胡適の長兄の娘の子にあたる。
11. 1914 年 3 月 12 日の日記。『胡適日記全編』（前掲書）
12. 1914 年 6 月 9 日の日記。『胡適日記全編』（前掲書）
13. 何索『胡適先生的感情世界』（国家出版社 1989 年 2 月）
14. 何索『胡適先生的感情世界』（前掲書）
15. 「致母親」1912 年 6 月（耿雲志・欧陽哲生編『胡適書信集』北京大学出版社 1996 年）「岳氏贈婢之惠，殊令人感激。」とある。
16. 「致江冬秀」1911 年 4 月 22 日（『胡適書信集』、前掲書）
17. 胡適と江冬秀との書信を通しての交流については、西川真子「胡適と江冬秀——民国時期一知識人の家」『ジェンダーからみた中国の「家」と「女」』（東方書店 2004 年）で検討されている。
18. 1914 年 6 月 8 日の日記（『胡適日記全編』、前掲書）
19. イーディスとの恋愛、および恋愛を通しての胡適の女性観の転換については、多くの先行研究が検討している。代表的なものに、藤井省三「恋する胡適——アメリカ留学と中国近代化論の形成」（『岩波講座 現代思想』第 2 巻 岩波書店 1994 年）がある。
20. 1914 年 11 月 2 日「容認遷就，各行其是」（周質平編訳『不思量自難忘——胡適給韋蓮司的信』安徽教育出版社 2001 年）
21. 「致母親」1915 年 2 月 18 日（『胡適書信集』、前掲書）
22. 白吉庵『胡適伝』（人民出版社 1993 年 2 月）
23. 「致母親」1915 年 4 月 28 日（『胡適書信集』、前掲書）
24. 「致母親」1915 年 10 月 3 日（『胡適書信集』、前掲書）
25. 1915 年 3 月 28 日「擬写第二封《公開信》／江冬秀」（『不思量自難忘——胡適給韋蓮司的信』、前掲書）
26. 胡適「敬告中国的女子」（周質平編『胡適早年文存』遠流出版 1995 年）
27. 胡適「論家庭教育」（『胡適早年文存』、前掲書）
28. 1915 年 10 月 30 日の日記（『胡適日記全編』、前掲書）
29. 胡有守「胡適夫人江冬秀」（顔振吾『胡適研究叢録』三聯 1989 年 2 月）
30. 「致母親」1918 年 4 月 13 日（『胡適書信集』、前掲書）
31. 「致胡近仁」1918 年 5 月 2 日（『胡適書信集』、前掲書）
32. 「致母親」1918 年 8 月 24 日（『胡適書信集』、前掲書）
33. 胡適「先母行述」1918 年 12 月（耿雲志編『胡適伝記作品全編』第一卷、前掲書）
34. 石原皋『閑話胡適』（安徽人民 1985 年 6 月）
35. 下見隆雄『孝と母性のメカニズム——中国女性史の視座』（研文出版 1997 年）、『儒教社会と母性——母性の威力の観点でみる漢魏晋中国女性史』（研文出版 1994 年）を参考。

胡适的结婚和他的母亲

羽 田 朝 子

中国现代新文化运动的中心人物胡适在《新青年》上发表了一系列的有关女性解放和自由恋爱的文章。但是正在他全力以付推进家庭革命的时候，却接受母亲之命，结成了旧式的婚姻。新娘江冬秀是一位没有受过教育的、自幼缠足的女性。这件事情的背后隐藏着胡适对母亲的内心斗争。

胡适的母亲 16 岁时嫁给比她大 32 岁的胡传，23 岁时就当寡妇。胡传有前妻生的五个子女，他们的年龄跟她差不多。她在大家庭里她吃了不少苦，在无依无靠的情况下抚养胡适。胡适和他母亲之间的感情很深，他母亲无论家里家外都被称为贤母，胡适一生都对她抱着尊敬之念。胡适在美国留学的时候认识了一位美国女性，通过跟她的交流，胡适的女性观大大改变。但因为他不能硬着心肠来违背母亲，只好回国举办了旧式婚礼。然后胡适在母亲的面前掩饰对婚姻及妻子的不满，反而在理论上强烈地主张废除封建家庭制，提倡自由恋爱和女性解放。